

●利用者3● 78歳 女性【医療ニーズの高い認知症者支援】

✓医療ケアの必要な認知症の利用者に対し、原疾患の進行に合わせた支援を実施

✓強い利用拒否に対し、馴染みの職員が対応することで、通いや泊りが利用可能に

1. 利用者の基本情報

世帯構成	夫婦のみの世帯				
介護力	主たる介護者は夫（77歳）。常時、介護可能。				
要介護度	要介護4				
障害高齢者の日常生活自立度	B2	認知症高齢者の日常生活自立度			Ⅲa
ADL	移動	食事	排泄	入浴	着替え
	全介助	全介助	全介助	全介助	全介助
主な傷病	・進行性核上性麻痺 ・意識消失発作 ・脳梗塞後遺症 ・認知症				
必要な医療処置	・留置カテーテル ・褥瘡の処置 ・服薬管理 ・摘便 ・リハビリテーション				
ターミナル期	ターミナル期ではない	病状の安定性・ 悪化の可能性		不安定・悪化の可能性あり	
特記事項	・予測できない意識消失発作を頻回に起こすようになった。				

2. 利用開始の経緯と利用開始直後のサービス提供状況～利用拒否への対応～

○利用開始の経緯

- ・他の場所に住んでいる家族（家族の嫁ぎ先の姑）が、同一法人の居宅介護支援事業所を利用していたことをきっかけに、同一法人の居宅介護支援事業所に連絡があった。サービス利用の拒否の強いことを相談された。
- ・そこで、まず、同一法人の居宅介護支援事業所で対応し、訪問看護、福祉用具貸与の利用を開始した。認知症の症状が悪化し、レスパイトへの対応が必要となり、同一法人の居宅介護支援事業所と相談し、通い、泊まりに対応できる当事業所を利用することとなった。

○利用開始から最初の2週間のサービス提供状況

- ・サービス利用への拒否が強いため、通いでは、訪問看護と兼務している馴染みの看護師が対応するようにした。週1回の通い、週2回の訪問（看護）からスタートし、様子を見ることとした。
- ・入浴、洗髪、おむつ交換、排便コントロール、コミュニケーションに対応しているほか、頻回な立ち上がりと歩行を心掛けた。
- ・また、認知症状の観察と見守りを行った。

	1 日 目	2 日 目	3 日 目	4 日 目	5 日 目	6 日 目	7 日 目	8 日 目	9 日 目	10 日 目	11 日 目	12 日 目	13 日 目	14 日 目
通い	○							○						
訪問(看護)			☆ 1回			☆ 1回				☆ 1回			☆ 1回	

3. サービス提供状況

～慣れてきたことで通いの回数増、泊まりの利用も可能に～

○直近の2週間のサービス提供状況

- ・当初、利用拒否が強かったが、慣れてきたことにより、通いの回数を増やすことができた。また、泊まりもできるようになった。
- ・通いの回数を増やしたり、泊まりを行うことで、家族も介護負担が軽減され、看護小規模多機能型居宅介護の利用の良さを感じているようだ。
- ・本人は寝たきりの状態であり、進行性核上性麻痺の進行による経口摂取低下、栄養状態の低下が見られる。褥瘡の処置が必要であり、通いででの処置だけでなく、訪問（看護）も組み込み対応している。
- ・その他、創感染によりバルーン留置カテーテル管理、口腔ケアなどに対応している。

	1 日 目	2 日 目	3 日 目	4 日 目	5 日 目	6 日 目	7 日 目	8 日 目	9 日 目	10 日 目	11 日 目	12 日 目	13 日 目	14 日 目
通い	○	○	○	○	○			○	○	○		○	○	
泊まり		●							●					
訪問(介護)											□ 1回			
訪問(看護)						☆ 1回	☆ 1回				☆ 1回		☆ 1回	

4. 状態の突然の変化への対応

○利用者の体調の変化、状態の変化があった時期のサービス提供状況

- ・通いのサービス利用中に、意識消失し、救急搬送された。その後、自宅に戻ったが、医師の診察は、病院へ通うのではなく、往診に切り替えた。
- ・往診は、利用者の自宅と病院が近いことから、通いから戻ってから自宅へ往診に行く場合もあるが、通いの際に事業所へ往診に来てもらうことが多い。主治医の予定と調整しながら対応している。

【変化の状況】意識消失、血圧低下で救急搬送

	1 日 目	2 日 目	3 日 目	4 日 目	5 日 目	6 日 目	7 日 目
通い	○	○			○	○	○
訪問(看護)			☆1回	☆1回			

5. 認知症を有する人にとっての看護小規模多機能型居宅介護の利用効果

<認知症への対応>

- ・認知症周辺症状の対応、見守りを中心に対応した。昼夜問わず徘徊をし、通いの利用の際には、職員は何kmでも疲れるまで付き添って歩き、利用者が疲れて歩けなくなったら、携帯電話で事業所へ連絡し、車で迎えにきてもらうなどした。利用者に寄り添ったサービスを提供した結果、認知症の周辺症状は落ち着き、穏やかになった。泊まりも利用できるようになった。
- ・認知症でセルフケア能力が低下していたため、事業所の通いで処置を行い、家では寝るだけにする事ができた。

<毎日の通いで家族の休息>

- ・夜間の徘徊に対応している介護者の負担を軽減するため、ほぼ毎日、通いサービスを利用することで、日中に介護者の休息を図ることができた。

<原疾患の進行に合わせた支援>

- ・原疾患の進行により、ADLが低下し、介護内容は変化していった。その折々で最善と思う手法や介助を行い、また夫にも助言・指導を行った。
- ・医療ニーズは高まっており、体調に合わせた摂食援助や褥瘡処置を通じて、日々の暮らしを援助している。看護小規模多機能型居宅介護によって、本人の変化を家族とともに見守り、受け入れ、援助することができている。